

キリストの十字架

父よ 彼らをお赦しくさい

ルカの福音書23:32～38



パームサンデー（しゅろの日曜日）

イエスさまは、私たちが罪の奴隷から解放し、御国へ招き入れるために来られたメシア（＝油そそがれた者）として、この地上に来てくださった。しかし、当時のユダヤ人たちは、ローマ帝国からの政治的メシアを期待していた。

受難週

◆日曜：エルサレム入城（ホサナと大歓迎）

◆月曜：葉の茂ったいちじくの木、宮清め

◆火曜：枯れたいちじくの木、論争

◆水曜：ナルドの香油、ユダの策略

◆木曜：最後の晚餐、洗足、ゲッセマネ、ユダの裏切り

◆金曜：

・夜明け前：祭司長たち⇒大祭司の家へ

・鶏が三度鳴く前：ペテロの裏切り

議会、大祭司によるイエスへの裁判⇒ピラト⇒ヘロデ⇒ピラトの裁判

・朝：ゴルゴダへの道

・午前9時：イエス、十字架につけられる

・ローマ2代目皇帝：ティベリウス

・ガリラヤ・ペレア領主：ヘロデ・アンティパス（ヘロデ大王の子）

・ローマ帝国の第5代ユダヤ属州総督：ポンティア・ピラト

・大祭司：カヤパ（アンナスは しゅうと）

十字架上の七言

◆午前9時～正午

①父よ。彼らをお赦しくさい。彼らは何をしているのか、自分でわからずにいるのです。

（ルカ23:34）

②まことにあなたに告げます。あなたはきょうわたしとともにパラダイスにいます。

（ルカ23:43）

③女の方、そこにあなたの息子がいます。そこに、あなたの母がいます。

（ヨハネ19:26-27）

◆正午から全地暗くなる、午後3時頃～

④わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。

（マタイ27:45 マルコ15:34）

⑤わたしは渇く。

（ヨハネ19:28）

⑥完了した。

（ヨハネ19:30）

⑦父よ。わが霊を御手にゆだねます。

（ルカ23:46）

◆イエスはもう一度大声で叫んで、息を引き取られた。すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。（マタイ27:50 - 51）

23:32 ほかにふたりの犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために、引かれて行った。

23:33 「どくろ」と呼ばれている所に来ると、そこで彼らは、イエスと犯罪人とを十字架につけた。犯罪人のひとは右に、ひとは左に。

23:34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しく下さい。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。

23:35 民衆はそばに立ってながめていた。指導者たちもあざ笑って言った。「あれは他人を救った。もし、神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ってみろ。」

23:36 兵士たちもイエスをあざけり、そばに寄って来て、酸いぶどう酒を差し出し、

23:37 「ユダヤ人の王なら、自分を救え。」と言った。

23:38 「これはユダヤ人の王。」と書いた札もイエスの頭上に掲げてあった。

自分の十字架を負う

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい」(マルコ8:34)

イエス様は、父なる神に死に至るまで従順に歩まれた。そのように、私たちも、自分の思いや自分の欲望の達成ではなく、神様の御心に従順になることが「自分の十字架を負う」という意味である。これこそが真の祝福の道である。



十字架上での罪の赦し

ミス青森に選ばれた女性がいた。多くのの人から祝福を頂いたが、ある一人の女性が彼女をトイレに呼び出し、硫酸を顔に掛けた。「なぜこんな事に」昨日まで有頂天でいたのに、奈落の底に落とされた悲しみ。何度も死のうとした。

しかしそのとき、窓から十字架のネオンが見え、不思議に教会に行ってみたいという気持ちが起こされた。当初は、メッセージの意味が分からなかった。でも続けて通う内に段々と分かってきたのが自分の罪であった。「自分に対して酷い仕打ちをした彼女を恨んでも憎んでも当然だ」と思っていたけれども、自分の中にある「恨み」や「憎み」こそが問題であり、そのためにイエス様が十字架に掛かって下さった事が、段々と分かってきた。

程なくしてイエス様を救い主として信じた彼女に、洗礼式の時牧師が聞いた言葉が「あなたには多くの事を聞く必要はないと思う。ただ一つの事を聞きます。あなたはあなたに硫酸を浴びせ掛けた人を赦しますか？」暫くの沈黙後に、彼女は顔を上げ、「はい。私もイエス様によって自分の傲慢な罪を赦して頂きました。ですから私もその人を赦します」と言った。

彼女のその言葉は真実であった。彼女は洗礼式の後硫酸を自分にかけたその人に「私は今まで、あなたの事を憎んで当然、恨んで当然と思い、そのようにしてきた。でも聖書を通してその様な心こそが本当の自分の問題であり、それらの傲慢こそが問題である事を教えられた。その罪の為にイエス様が死んで下さった事が分かります。ですから私はあなたを赦します。あ

なたが私にその様な事をされたのは、私もあなたがそうせざるえない事をしてきたのでしょうか。その様な傲慢さがあったのでしょうか」と手紙を書き送った。

刑務所の中でそれを読んだ彼女は「嘘だ」と思った。その様な事が有り得るはずがない。でも何度も何度も同じ内容の手紙が送られて来て「あなたの出所を待っています」と書かれてあった。彼女の出所当日には和歌山まで迎えに行った。その後東京で彼女達は同居する事になった。

そればかりか、硫酸を掛けた側の人は看護師になりたかったそうですが、その学費を、硫酸を掛けられた彼女が出し、そうして看護学校を出て看護師として働いておられる。このような赦しを实践した彼女は、東北地方の牧師夫人であるという話を聞いた事がある。

私達も祈られている

もし私たちがこのイエス様の『父よ。彼らをお赦しください。彼らは何をしているのか自分では分からないのです』という祈りが、自分の為の祈りである事が本当に分かったら、私達もまた、彼女のようになることができるようになる。

私達らは、キリストからこのように祈られる以外には、どこにも救いはない。事実、イエス様は私たちのためにも、そのように祈って下さった。だから今の私達がある。そうであるなら、私達もまた「この人を赦します」「あの人を赦します」とできるようになる。また「そうさせて下さい」と祈っていく事が必要ではないか。